



| | |
|------------------|---|
| Title | 北海道におけるキリスト教学 : 日本におけるキリスト教学 |
| Author(s) | 菅沼, 英二 |
| Citation | 基督教学, 27, 36-42 |
| Issue Date | 1992-07-05 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/46516 |
| Type | other |
| File Information | 27_36-42.pdf |



[Instructions for use](#)

日本におけるキリスト教学

菅 沼 英 一

北海道基督教学会が三十周年記念の年を迎えたことをお慶び申し上げ、これまで御尽力された方々に感謝申し上げます。

このシンポジウムにおいて、最初に北海道基督教学会の存在意義にふれ、次に、「基督教とは何か」という問題を、広く日本全体の視野において、「日本基督教学会」の現実と課題に則して、発題いたします。

一 北海道基督教学会

一、北海道基督教学会の発足⁽¹⁾

一九六二年（昭和三十七年）六月十六日、日本基督教学会長・石原謙博士と同学会専務理事・山本和教授を迎えて、北大農学部において、設立総会が開催され、会長に中川秀恭北大教授が選出された。設立記念講演は、「教会再一致の問題について」浅井正三氏、「教会史のイデーと

歴史神学の問題」石原謙氏によって行なわれた。

二、北海道基督教学会発足時の時代背景

一九六二年は時代の転換期であった。

a、日本基督教学会（一九五二年設立）十周年記念の年で、学会誌「日本の神学」創刊の年でもあった。

b、キリスト教界の世界的状況

1、第二ヴァチカン公会議が教皇ヨハネス二三世によって召集され、ローマ・カトリック教会の近代化路線が始った年であった。

2、世界教会協議会（W・C・C）の第三回総会（一九六一年）がニューデリーで開催され、エキュメニカル運動が推進された。

3、共同訳聖書翻訳

世界教会協議会とローマ・カトリック教会の近代化とは「教会一致」の共通基盤として各国において「共同の聖書」Common Bibleを持つ事を必要とした。第二バチカン公会議で「神の啓示（聖書）に関する憲章」により、各国の言語に聖書を共同訳すべきと宣言され、他方、死海写本の発見とその研究成果（一九四七年以来）によ

り、ヘブライ語原典改訂（BHS・一九六七～七七出版）がなされた。

三、北海道基督教会の特徴

このような時代背景を反映して、北海道基督教会に關して次のような特徴を挙げることが出来る。

- a、発足当初からエキュメニカルである。
- b、教会（カトリック教会、プロテスタント教会）と大学（キリスト教主義大学・短大及び国立大学等）との協力

c、教職者及び Lay-theologian との協力

d、キリスト教に關する学際的協力の

北海道基督教会は同時に日本基督教会の支部とし、独自の学会誌「基督教学」（一九六六年創刊）を持つユニークな学会として三十年間、順調に発展してきた。これは歴代の中川会長、秋田会長、浅井会長、赤城会長、並びに会員の積極的な協力の賜物であると思ひます。

二 キリスト教学とは何か

「キリスト教学」⁽³⁾ という名称は日本の独自の歴史的背景に

よるもので、西欧では「神学・Theology」という名称が一般的である。

一、「キリスト教学」の歴史的背景

「基督教学」の名称が日本で公に使用されたのは大正八年（一九一九年）、京都帝国大学文学部規定の中である。

そこで文学部哲学科宗教学三講座設置の内容を宗教哲学、基督教学、佛教学と規定している。⁽⁴⁾ 大正十一年（一九二二年）六月に、宗教学第二講座として基督教学の講座が設置され、波多野精一教授が兼任され、昭和十二年（一九三七年）三月に専任となられ、同年七月に定年退官された。⁽⁵⁾ この事は日本における基督教学の成立を押しづける画期的な意義をもつ事件であった」と松村克己教授は記している。⁽⁶⁾ この講座での最初の講義が後に出版された「原始キリスト教」である。⁽⁷⁾

この基督教学講座は渡辺莊氏（富士見町教会々員）が「基督教学の学術的研究のため」寄付された資金をもつて設置されたものである。⁽⁸⁾

波多野教授退官後、松村克己講師（一九三七年十二月）、その後、有賀鉄太郎教授（一九五二年）がこの講座を担

当された。

戦後、キリスト教の学問的研究は自由となり、ミッシェン・スクールの中に基督教学科を設置した大学もある。⁽⁹⁾戦後の学制改革に伴い、「キリスト教学」はキリスト教主義大学・短大の一般教育課程に設置され、各大学の建学の精神にかかわる基礎的教科として重視されるに至った。かくして、キリスト教主義大学の発展と共に、日本において「基督教学」は急速に発展し、基督教学を代表して、波多野精一教授が一九四九年に日本学士院会員とされた。⁽¹⁰⁾

二、「キリスト教学」とは

「キリスト教学とは何か」の問いが当初から、今日に至るまで、問われている。

a、熊野義孝（東京神学大学教授）はその著書「教義学」の中で「我国の新制大学内に設けられた『基督教学科』というものが何を学究の主題となすのか。

神学及至教義学のほかに、宗教学及至哲学ならざる基督教学とは何であるか」との問題を神学の立場から提起された。⁽¹¹⁾

b、キリスト教学は何かの問題は「神学と基督教学」との対比で展開されてきた。

松村克己教授は「神学と基督教学」の小論文（一九五三年）で、「両者が今日の日本の情況に於いて全く同一ではないと考えられるところに問は始まる」とし、それぞれに意義を見出そうとする。即ち「神学とは、特定の宗教の信仰の立場に立ち、その信仰の真理性を承認し且つ主張せんとする立場にあつて成立つ学である。基督教学は宣教の課題を中心として教会という場所に於いて成立つ学である。従つて、神学は理性を原理とする学一般と著しくその性格を異にする。基督教学は信仰を前提としドグマを原理とするのではなくして、学一般の前提と方法とに従いつつ、信仰を指してドグマの理解を企てるにあると考えられる。基督教学は一般学問意識の共同の場に立つて、基督教を哲学的また歴史的に考究するにある⁽¹²⁾」と定義づけている。

c、日本基督教学会は第九回学術大会（於京都大学・一九六一年）のシンポジウムで「基督教学とはなにか」を主題として行われた。⁽¹³⁾ 発題者四人の中、山本和、竹内

寛両氏の立場はキリスト教の研究としての学は原理的には神学のみということになり、山田晶、有賀鉄太郎両氏の立場は神学とならんでキリスト教の成立も可能であることを主張したものであったと⁽¹⁴⁾されている。

このシンポジウムに備えて、立教大学では「キリスト教」とは何か⁽¹⁵⁾「キリスト教」⁽¹⁵⁾第三号一九六一年が編集された。それに基づき、中沢洽樹教授は「キリスト教」とは何か⁽¹⁵⁾を問題としている。キリスト教と神学とを対比させ、それぞれが独自性をもつものとしている。神学は教会の学、信仰の学であり、キリスト教は世俗の学、理性の学であるとしながら、両者の関係については「キリスト教も神学を内に包みながら批判しうる立場に立ち、諸科学と並存する学問分野として成立しうる」と述べている。

キリスト教が存在する限り、キリスト教にかかわる者は「キリスト教は何か」を絶えず問う課題を担っているのかも知れない。

三 「日本基督教学会」の課題

日本基督教学会の設立総会は一九五二年十月二十四日、青山学院大学で開催された。初代学会理事長に石原謙氏を選び、「本会は基督教を学問的に研究する者相互の連絡を計ると共に基督教学の発達を期する」(第二条)の条項を含む学会規約を制定した。⁽¹⁶⁾

爾来四十年、歴代の学会理事長のもとに基督教学会は会員数においても、研究レベルにおいても成長、発展してきた。しかし、「日本におけるキリスト教(会)」の担っている問題と課題は再検討を要すると思われる。

a、キリスト教の再検討

ここに三氏の意見を紹介する。

1、「キリスト教とは何かの」発題の意義は日本の精神風土における学問の特殊性と将来性にある。キリスト教とは神学的諸学科のみならず、一般にキリスト教に関連のある対象に関する一切の学問の総括的呼称として成り立つ」

(竹内寛氏)

2、「神学は信仰の学であり、キリスト教は超教派的(エキュメニカル)で、自由な広い観点に立つて行

われる神学研究である」(菅 円吉氏)

3、「キリスト教は神学を内に包みながら、更に広い領域に亘るもの」(中沢洽樹氏¹⁵)

キリスト教は神学と対立するのではなく、神学を内包し、キリスト教に関する総合的な研究であるとの観点に立つことが望まれる。

b、キリスト教学会の課題

赤城泰氏は「本学会の中には、国立大学等において講ぜられる『キリスト教』と、神学大学や大学の神学部・神学科における『神学』の二つのモチーフが当初から併存していた」と問題を指摘しながら、その併存は「本学会のすぐれた寛容性」のゆえと述べておられる。

中川秀恭氏¹⁶はこの問題を容認しつつ、「このことが学会の特質をなしており、二つのモチーフによる研究が相互補完的に働いて、学会の推進力になって今日にいたっているのではないだろうか。将来もそうあることを望みたい」と述べておられる。

日本基督教学会は教職者研究者、信徒研究者等多彩な会員相互の協力・対話の場となることが望まれる。更に、

基督教学会は聖書学(旧約学・新約学)、歴史学、組織神学、実践学等の諸部門の学問を統合するような機能を果たす総合的な学会として、学際的な交流の場となることが望まれる。

c、日本における課題

基督教(会)は日本においてキリスト教が直面する諸問題(大学の教育・教会の宣教等)に対する課題に関しても問われていると思う。²⁰

本学会の名称は「日本基督教学会」であるが、本学会誌の名称は「日本の神学」であることに、問題性と共に特性があると言わねばならない(赤城泰会長)。

北海道基督教学会が日本における使命を担って、すぐれた寛容性をもって、ますますに発展することを願ってやみません。

注

1、宇野光雄「学会の歩み」基督教第十三号一九七八年、三

〇五頁

2 浅井正三「エキュメニズム教会」に就いて、基督教第

- 1号一九六六年、九―一三頁
- 3 キリスト教学の英文表記
- a Science of Christian Religion 松村克巳「神学研究」〔関西学院大学〕創刊号（一九五二）
- b Research on Christianity 日本基督教学会「日本の神学」創刊号（一九六二）
- c Christian Studies 日本基督教学会「日本の神学」第二号（一九六二）以来、この表記を使用しており、北海道基督教学会もそれに準じている。
- d Christian Theology カール・マイケルソン（一九六九）著書の表題に使用
- 4 松村克巳「神学と基督教学」神学研究（関西学院大学神学部）、創刊号（一九五二年）九七頁
- 5 波多野精一「基督教の起源」岩波文庫（一九七九）の中、解説（松村克巳）二七二頁
- 6 松村克巳、前掲書二二二頁
- 7 波多野精一教授没後昭和二十五年九月、岩波書店刊「岩波全書」
- 8 波多野精一全集第六卷、岩波書店、昭和四十四年（一九六九年）年譜五―六頁。
- 有賀鉄太郎「日本の神学」第三号、一九六四年、序・第三輯を出すにあたって、五頁。
- 9 「キリスト教学科」の設置
- 青山学院大学文学部基督教学科（廃科）
- 立教大学文学部キリスト教学科（一九四九年）
- 東北学院大学文学部基督教学科（一九六四年）
- 茨城キリスト教大学文学部キリスト教学科（一九六七年）
- 10 基督教学を代表する日本学士院会員
- 波多野精一（一八七七―一九五〇）同会員（一九四九―一九五〇）
- 石原謙（一八八二―一九七五）同会員（一九五三―一九七五）
- 関根正雄（一九二二―）同会員（一九八〇―）
- 11 熊野義孝「教義学」第一卷、新教出版社一九五四年、一四頁。
- 12 松村克巳、前掲論文九八、九九、一一一頁。
- 13 第九回学術大会、一九六一年十月十二日シンポジウム、主題「基督教学とはなにか」。発題は関東学院大学山本和立教大学 竹内寛、大阪市立大学 山田晶、京都大学 有賀鉄太郎の諸氏によった。（「日本の神学」第一号一九六二年、一三九頁）
- 14 有賀鉄太郎、前掲文四頁。
- 15 中沢治樹「キリスト教学」第一号（立教大学キリスト教学会・一九七〇年）一―三頁。

16 有賀鉄太郎、前掲論文、日本の神学第三号、三頁。
17 歴代の理事長は次の通りである。(在位期間)

石原 謙 (一九五二～一九六五)

菅 岡吉 (一九六六～一九六九)

有賀鉄太郎 (一九七〇～一九七三)

岸 千年 (一九七四～一九七六)

中川秀恭 (一九七七～一九八四)

城崎 進 (一九八五～一九九〇)

ネメシエギ (一九九一～)

18 赤城泰「日本の神学」第三号 序、一九八四年

19 中川秀恭「日本の神学」第二四号 序、一九八五年

20 有賀鉄太郎 序、「二十年の歩みののちに」日本の神学第
十二号、一九七三年。

付記「日本のキリスト教学(会)の将来」(座談会) 日本の神学

第一七号、一九七八年。

古屋安雄氏の司会で左近淑(故人)、土屋博、高森昭、宮
谷宣史、中川秀恭、八木誠一の諸氏が参加されています。